

プラトンの宇宙論における〈時間〉の諸問題

岩野 秀明*

はじめに

時間は、空間とともに自然がそこに存在する枠組である、というのが近代以後の自然観に共通の前提である。自然が形成される時、すでに時間は空間とともにあった。この限りない連続体は、自然の運動と変化の前提である。時に始まりはないのである。この近代自然科学の前提は、しかし、すでにアリストテレスのうちに用意されていたものである。アリストテレスにとっては、時は、明確に、「生ぜざるもの」(Physica, 251B17)であり、「時は常に在る」(同書、251B22)と言われる。そのアリストテレスから見ると、プラトンは、例外的な思想の持主であって、彼は「プラトンだけが〔時を〕造った」と(251B17)批評した。それにもかかわらず、時間の連続性への確信は、すでにギリシア人の科学的精神の共有財産であるように思われる。時間そのものがすでに永遠であって、永遠 (eternal) と区別される永続性 (everlasting) の意味で〈aídios〉が、哲学者のあいだで専用されるようになる。

このように、プラトンの時の創造の理念は、科学的精神に背反するものであって、プラトンの自然哲学は、神話として語られた詩的想像力の所産であり、彼自身述べているように、宇宙創生論は、〈真なる理説〉そのものではなく、〈蓋然的な理説 (eikōs lōgos)〉にすぎないと断定しなければならぬのかもしれない。しかし他方で、この宇宙創生の神話に知的好奇心と想像力

がむかうことも事実である。この好奇心を充してくれるのは、筆者にとっては、論理的なアリストテレスであるよりも、神話的な形式を有するプラトンであるのは興味深い。今日では宇宙は単に永遠な構造ではなく、生まれ成長しそして死を迎える〈歴史〉を持ったものとして語られる。こういう状況の中では、プラトンの単に〈確からしい〉理論に、より多く注意が向かうのも当然であろう。

かさねて言うなら、宇宙の秩序がいかにして形成されてきたものか、という問題は、決してそれ自体は、神話的でも蓋然的でもない。宇宙の秩序は永遠なものである、という命題よりも非科学的であるわけのものではない。このような問題を解決してゆく上で時間の在り方についてどのような見方が可能か。

プラトンの時間論を考察するもう一つの視点は、永遠と時間との関係である。時間は、永遠の影像として規定される。原型と影像 (parádeigma, eikōn) のこの関係はいかなるものか。

かくして、プラトンの宇宙論における時間の問題は、二つに分けられる。一は、時の始元の問題である。時も創造されたものであるかぎり、創造によって始まった系列であるとするれば、時にも始元があることになる。しかし、それ以前には時は存在しない、という不合理はいかにして解決されるだろうか。これが第一の問題であって、プラトンの自然哲学のうちにその解決をさぐってみよう。——二は、永遠の像として規

* 東京情報大学助教授

定された時間にかかわる問題である。〈永遠 (aiōn)〉とは何をいうのか。さらに、時間がその〈像〉であるとは、いかなる意味なのか。

以下、

- 1 では、永遠と時間の問題、
- 2 では、時の始元の問題、
- 3 では、特にアリストテレスの時間論を、プラトンのそれを発展させたものとして考察してみたい。

1 〈永遠の像〉としての〈時間〉について

順序としてティマイオス篇で時間の定義をのべている個所を訳出することから始めたい*。

〈Timaios 37C6以下〉。

造物主は、永遠の神々の神殿**として成ったこのもの〔宇宙〕が運動し生きるのを見て、喜んだ。うれしく思って、さらに原型により似ているものに作ることを考えた。原型が永遠の生物 (zōion aiōdion) であるように、この宇宙もできるかぎりそのようなものとして完成しようと企てた。ところで、この生物の自然 (physis) は永遠的なものであるが、そのことを造られたものに完全につけ加えることは不可能であった。そこで、永遠 (aiōnos) のある運動する像 (eikō) を造ることを考えて、天に秩序を与えるのと同時に、一なるものうちで常に変わらない永遠の・数に従って動く・永遠的な (aiōnion) 像を造った。それがわれわれが時 (chrōnos) と呼んでいるものである。

この定義の科学的な側面に関して補っておこう。上の定義から、プラトンの〈時〉は、〈数的〉構造を持っており、ゆえに〈数に従って動く〉と形容されていることが分るが、さらにこの〈数〉は、天体によって測られるものとされている。時は、「太陽、月、および五つの惑星」(Tim. 38 C) によって測られ、「時の数」(38C6) という根

本性格を獲得する。天体は「時の道具」(41E5) とも言われているように、ここでは、天体が時計である。「時の数」を測る道具として、「時が生じるために」(38C5) これらの天体は創造されたとすら言われている。

ところでこのように、天体の規則的の反復運動を時間の根拠とする考え方は、神話的でも形而上学的でもなく、当時の天文学的知識を前提とする経験科学的な思考法を取り入れた結果であると考えられる。

さて、時間と永遠との関係について解釈したものとして、近年すでに Böhme や Rudolph によるすぐれた論著が存在する***。さらには、Cornford (1937) による注釈にもこの個所についての興味深い議論がかかって在った。プラトンの解釈から離れても、この問題がきわめて普遍的なものとして哲学者の努力が傾けられてきたことは言うまでもない。

ところで、〈aiōn(永遠)〉についての考え方として、おおよそ、二つの視点が可能だと考えられる。一は、前記の引用文中にもある〈永遠の生物〉の属性として、aiōn をとらえるゆき方であり——これを (a) とする——、二は、〈つねに在るもの〉(27D6) のいわば存在論的な属性として、aiōn をとらえるゆき方である——これを (b) とする。プラトンの aiōn に対する視点は、これら (a) (b) のとらえ方が重ねられたものと考えることができる。プラトンの叙述の仕方は、最初に (b) のゆき方がとられ——27D5以下——、次に (a) のゆき方が採用され——30C2以下——、以後ふたつのゆき方が同時に用いられる。そのことは37C6以下の定義によくうかがえる。この二つのゆき方の特徴は次のようである。

(b) が、存在論的とも形容したとおり、イデア論に結びついた思考法を反映しているのに対して、(a) は、イデア的な〈存在〉を、〈生物〉に比喩する点で特徴的である。プラトンにとっ

* Schleiermacher 独訳、Cornford の英訳、を参考とした。

** Schleiermacher では、〈飾り Schmuckstück〉。Cornford の解釈に従う。

*** 引用文献は原則として著者名のみを示す。著書名については最後の〈文献〉を見られたい。

ては、この宇宙そのものが生命的存在であることは単なる喩えではないが、しかしアイデアの存在に対してはそのことは比喩にほかならない。さらに、aiōn という表現そのものも、生命あるものの〈一生 (lifetime)〉の意味がその核心にあり、この比喩的表現に自然に適合する。

(a) における〈生物〉の比喩を比喩以上のものに高め、プラトンに由来する思想を展開したのは、プローティノスのエンネアデス III 7-3 —「永遠と時間について」— である。比喩としての〈生物〉は〈生命 zōē〉に換っているが、それは比喩以上のもの、アイデアの全体的組織ないし体系の生命性あるいは動性をあらわそうとしている。(zōē, III-7-3 f. 12 etc.) アイデアの全体的組織というものは、プラトンのソプイステース 254D-E から五種の論理のカテゴリーとしてのアイデアを引用して、それら諸アイデアの一体性を、〈生命〉という語をもちつつ、説明したことを指す*。プローティノスの〈生命〉がアイデアの組織の属性であり、またプラトンの〈生物〉が同様であることは否定できない。Tim. 39E1には、「この宇宙が完全にして英知的な生物にできるだけ似る…」という表現も認められる。プローティノスの解釈を敷衍して考えるならば、この宇宙の原型たる〈生物〉は、アイデアの全体的な組織ないし体系であることは否めない**。

このように、(a) のゆき方といえども、比喩のヴェールをひと度はがせば、(b) と同様やはりアイデアが姿を現わすのだが、(a) の特徴は、すでに述べたように、〈永遠 aiōn〉の〈生の時間 (lifetime)〉としての意味に自然に結びつくことである。

〈aiōn〉をこの意味においてとらえるならば、永遠そのものが時間的性格をもっていることに

なる。そうなると、時間がそのような永遠の〈像〉と定義されるのは、きわめて自然なことになる。その場合、時間は直線的なものとしてではなく、〈円環〉として表象されることが、近代以後の時間概念とへだたる点である。

特に、プラトンは、当時のギリシア人に一般的な〈大いなる年 mégas eniautós〉に対応する〈完全年 tòn téleon eniautón〉 (Tim. 39D4) を示しているが、〈生の時間〉とこの〈円環〉との意味的な重複によって、時間が aiōn を〈模倣〉し、宇宙が〈完全にして英知的な生物 tōi teléōi kai noētōi zōiōi〉 (Tim. 39E1) にできるかぎり〈似る〉ことを物語ろうとするのである。

アイデア的モデルに〈生命性〉と〈生の時間〉を述語する点に、プラトン思想の独特の難しさがあるが、アイデアの対象を考えないことにすれば、時間の全体がすでに〈aiōn〉なのである。これがプラトン以前のある哲学者達に共通の aiōn の意義であったと考えられる。アリストテレスは次のように述べている。

〈De Caelo, I, 9, 279A22~30〉

なぜなら、この語(aiōn)は、古代の人々によって一種の神聖なインスピレーションで述べられていたから。個々のものの生(zōē)の時間を包括する究極、その外には自然に従うもの(生)はなにも存在しないのだが、それを個々のものの aiōn とひとは呼んだ。しかし同じ理由から、全天界の究極および全ての時と無限を包括する究極はまた aiōn である。それは、常に在る(aei einai)ところから、不死・神的という形容を受ける。他の生物は、その存在と生をそれに依存している、あるものは明瞭な仕方、あるものは不明瞭な仕方である。

別の個所でアリストテレスは、プラトンの時間を、〈天球の運動〉と評したが、(Physica, 218 A33~218B1 tēn toū hólou kinēsin) これがまさに自然哲学的な意味での、すなわちアイデア論を含まない、aiōn の正体である。

ところで、〈aiōn〉の語義が、単なる〈生の時間〉すなわち限りある時の意味から、〈限りなき

*しかしアイデアの全体的組織の〈生命性〉とは何を意味するのか。この〈生命性〉とソプイステースの〈運動 kinēsis〉および〈zōē 生命〉とはどのように関連するのか。Böhme, S. 84f. にこの問題に対する解決を見ることができる。なお Beierwaltes, S. 40:30をみよ。

**この点に関して、Krämer, S. 127~8を参照。「純粋な存在は、そこでは、完全な生物という比喩によって表される。それは全てのアイデアを要素として自己のうちに含んでいる。」

永遠〉へ変化するのは、Festugièreによれば、エンペドクレスからである。

〈エンペドクレス 断片16〉

〔これら両つの力、愛と憎は〕かって在ったように、これからもあるであろう。限りなき aiōn は、この両つのものに事欠くことは決してないと、私は思う。

ここで言われている〈限りなき aiōn〉を、Festugièreは、〈天球〉のそれと解釈し、〈天球の限りなき aiōn〉という形で、aiōnにはじめて〈永遠〉の意味が与えられたとする。

かかる自然哲学的〈aiōn〉に対して、プラトンはイデア論的な意味を与えかえそうとしたわけである。

このように (a) のゆき方にあっては、円環としての時間の側からイデアの永遠を推測するという傾向が強いが、(b) のゆき方にあっては、すでに述べたように、イデア的存在そのものから出発して、時間の本質に説き及ぶという戦略がとられる。

(b) のゆき方を採った一人と考えられる Cornford は、aiōn を〈変化のない持続 duration without change or eternal unchanging duration〉と言いかえるが、この意味は、〈生の時間〉とは明らかに相違する*。

したがって、この〈変化なき持続〉は aiōn そのものとは独立の意味の由来をもつのだが、Cornford はこの点にほとんど注意を与えていない。筆者としては、意味の由来を区別して、(a) (b) 両つの異なるゆき方に、〈生の時間〉と〈変化のない持続〉をそれぞれ対応させ、プラトンの永遠と時間についての思索のあり方を理解しようとする。

ところで、Cornford は、Tim. 37E5~38A2 の表現に、パルメニデスの断片 8-5 の思想が反映 (echo) していることを指摘しているが、それは否定できない事であろう。

〈パルメニデス断片 8-5〉

それ [eōn] は〔過去形にて〕在ったとか、

〔未来形にて〕在るだろうとかいうことは決してない。なぜなら、それは、現在に全て共に、一なる・連続するものとして、在るのだから。〈Tim. 37E3~38A2〉

これらは全て時間の部分である。そして、〈在った〉〈在るだろう〉は、時間の生成した形相 (eîdē) であり、我々は知らず知らずそれを永遠の存在 (aiōdion ousían) へ移しているが、それは誤りである。なぜなら我々は、在った・在る・在るであろう、と言うけれども、あの存在には、在るのみが (tō éstin mónon) 真なる言表によって適しい。ところが、在った・在るだろう、は、時間のうちで運動する生成について述べられることが適しいのである。

ここに述べられた〈aiōdion ousían〉や〈tō éstin mónon〉という表現に、パルメニデス的存在をみてまちがいではない。宇宙創造の原型 (parádeigma) とパルメニデス的存在とが接近しているのである。それは、すでに述べたイデア的存在としての〈tō ōn aeî〉(27D6) にほかならず、これらは (b) の文脈に属している。そしてかかる存在としての aiōn は、〈変化のない持続〉の意味であるが、しかしかならずしも〈生の時間〉の意味ではない。〈aiōn〉をこのように (b) 系列の文脈に投げ入れることによって、前者の如き意味を帯び、(a) 系列の文脈に入れば後者の意味を帯びる。そして興味深いことには、本来後者の意味で理解されていた aiōn に、かかる文脈の移行を通じて、管見にすぎないが、新しい形而上学的な意味がもられるようになったと考えられる。

さて次の問題は、時間がかかる〈aiōn〉のいかなる意味における〈像〉であるか、すなわち (b) のゆき方を取った場合、時間の〈像〉性格はいかなる点にみとめられるか。

(b) のゆき方において〈aiōn〉と〈時間〉の類似性を考える際に、永遠と対立する時間の性質についてふりかえっておこう。上述の個所でプラトンが示しているのは、時間の〈部分〉(昼

* Cornford (1937) P. 102参照。

夜・月・年)と時間の〈形相〉(在った・在るだろう、または、在った・在る・在るだろう)である。このような時間の〈部分・形相〉は、変化を表わすものであって、〈常に同一で不動なもの〉(38A3)である〈永遠の存在〉(aídios ousía 37E5)の性質に背反する。時間をこのように〈部分・形相〉であるかぎりのものとみなすかぎり、時間は〈aiōn〉との類似性を示さない、すなわちそのかぎりにおいて、時間は永遠の〈像〉ではない。そこで〈時間の全体〉(Politeia VI498D, X 608C~D)あるいは時間そのものに着目する、すなわちグローバルな時間の在り方に注目することによって、時間の〈像〉性格ははじめて明らかになるだろう。〈時間の全体〉は、ティマイオスでは、〈完全年〉の概念として表明される。(Tim. 39D)

それでは、イデア的存在の属性たる〈aiōn〉と〈完全年〉としての〈時間〉とはどのような類似性をすなわち原型-像関係をもっているのか。管見によれば、それは二つの意味での〈同時性〉である。

一は、過去・現在・未来が完全年を周期として永遠に回帰することによって、比喩的な意味で同時——このように言うことは文法違反ではあるが——である。それはいわば〈縦の同時性〉である。これを〈同時性(U)〉と呼ぶ。等しいものの永遠の回帰、必然的な繰り返しに〈同時性(U)〉が述語される。通常の時間のように未来は常に新たな何かであれば、継時が述語されるのみである。ところでこの〈同時性(U)〉の原型に相当するものは、パルメニデスの〈存在(eón)〉である。(fr. 8-5)すでに見たように、プラトンはこの起源に遡りつつ、〈永遠の存在(aídiōn ousían)〉に〈tō éstin〉のみを述語としてゆるし、〈在った・在る・在るだろう〉という形相をそれには当然のこととして拒絶したわけである。(Tim. 37E6)そこには〈同時〉という言葉は見いだせないが、我々は〈全て共に〉という表現に〈同時〉をおきかえることができる。プローティノスは、〈aiōn〉について〈全てのものを同時に所有する生命〉というように、

同時性(háma)を明瞭に述べたのである。(Enneades III-7-3-18)この原型を映すものは世界時間〈完全年〉である。

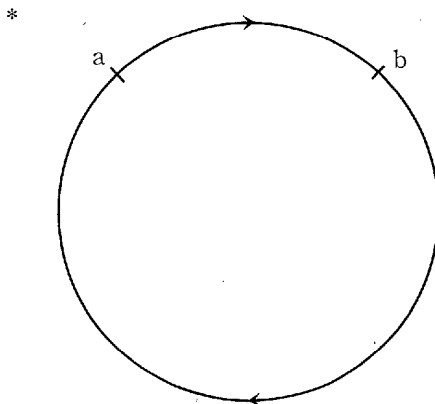
永遠の〈存在〉の同時性を反映する時間の同時性の第二は、通常の〈同時性(V)〉である。この〈同時性(V)〉は空間を隔てた現実的な同時と同じものだからである。そして〈完全年〉の天文学的な定義に、字義通りにはないが、含まれている。

〈Tim. 39D4~7〉

八周期全部の相互に一致して実現した速さが、同じもの・等しく運動するものの環に依って測られて、その頂点に達するとき、時間の完全な数は完全年を充す…。

このように、時間の同時性に着目するとき、〈aiōn〉と〈時間〉の〈原型-像〉関係は、一定の論理性をそなえた関係として考えることができよう。(a)のゆき方と相異なる点である。(a)では、〈比喩〉が核心にあるが、(b)では、〈永遠の存在〉から〈時間〉への論理的関係が著しい点である。

二つの同時性のうちの、〈縦の同時性(U)〉は次のように、単なる比喩としてではなく、より論理的な概念と考えることができる。〈完全年〉は円環によって表象される。図*において、時間が円環をなして矢印の方向に進むものとするとき、時点aと時点bとは、はたして前後の関係(<)を有するか。図*において明らかのように、aからbへの経過とbからaへの経過があるか



ら、一意的に $a < b$ ではない。プラトンがしばしば要請するように、時間を全体としてグローバルに見るならば、すなわち b から a への経過が存在すると仮定するならば、通常、 a から b への経過のみを見ている我々は $a < b$ と誤って判断していることになる。そこでこの関係、すなわち $a < b$ でも $a > b$ でもない事態を、〈同時性 (U)〉と定義して、この意味において、時間——円環として表象される——そのものに〈同時性 (U)〉の構造を与えることができる。勿論、前後関係が決まる通常の時間にはこの構造は存在しないわけである。

このように、すでに試みた、永遠回帰からする〈同時性 (U)〉の解釈を、この円環の位相からの解釈によって補うことができる。両者の意味は相違するが、この〈縦の同時性〉は、*aiōn* と時間の原型一像関係を、論理的に説明するための一つの手掛りになると考えられる*。

以上においては、永遠と時間の〈原型一像〉関係を、ふたつの同時性 (U) と (V) からみちびき出すことを試みたが、第三にイデア数論からこの関係を説明してみよう。

それは時間の数的構造を示すことによって可能である。プラトンの時間の定義から、数が時間の基本的構造を示していることが明らかである。他方において、〈*aiōn*〉は、非運動をその基本的属性として有し、〈一のうちにとどまる永遠の… (*ménontos aiōnos en henī*, Tim. 37D6)〉の表現にみられるように、〈*aiōnos*〉は〈一〉と結びついている。これに対して〈時間〉は、〈数に従って動く永遠的な像〉(37D7)であり、数 (*arithmós*) によって規定される。問題は、かかる時間の数的構造がイデア数論的文脈にいかにして適合しうるかである。

それは、*Philebos* 篇16C 以下および24A 以下の叙述のうちに見ることができる。この個所は、いわゆるイデア数論の〈対話篇の変様〉と

称すべきものであろう。ここに、時間が、イデア数論的意味で、数的構造を有することが示されている。

イデア数論の対話篇の変様とは次のようなことである。〈限定 *péras*〉と〈無限定 *tò ápciron*〉、両者の結合 (*koinōnía, míxis*) に依る〈生成〉、混合および生成の原因たる〈製作者〉それぞれの〈類 *géné*〉から、種々の価値・学芸が(美・音楽・健康・強さ)説明される。(Philebos. 27 B) さらには、存在者全体がかかる〈*géné*〉から構成されるという構想が示されている。(24A 以下。)

ところでこれらの原理 (*géné*) から構成されるものには、前記諸価値のほかに、〈年・季節・月〉(30C6)、すなわち時間的様態が含まれる。いまこの点に着目しよう。

〈Phil. 30C〉

これら〔限定と無限定〕にくわえて、年・季節・月を秩序づけ構成する、英知・理性 (*sophía, noús*) と呼ぶに適しい重要な原因が存在する。

〈年・季節・月〉の時間的秩序が生じるためには、天体あるいは天球の周転が必要であるが〈すべての周転〉(*pásēs tēs periphorás*, 28E5)も、〈宇宙・太陽・月・諸星〉とともに、理性 (*noús*) に支配される規則的な現象の一である、と言われる。〈理性がそれらすべてに秩序を与えると語ることは、宇宙・太陽・月・諸星・すべての周転の姿に適しいこと〉と言われる。(28E) 理性は混合の原因であるから、〈周転の姿〉と言われるものが、数的構造を有することは確かなことである。なぜなら、〈混合〉とは〈限定〉と〈無限定〉、イデア数論的に言えば、〈一〉と〈大にして小なるもの〉からの構成のことであるから、天球の周転がイデア数論的に規定され、そのことによって時間が測りうるものとなることは、明らかである。

以上のように、イデア数論的文脈に時間の数的構造が適合しうることは明らかであろう。〈一〉に *aiōn* を対応させ、〈数〉に時間を対応させることによって、*aiōn* と時間の〈原型一像〉関係

*この意味での位相的な同時性について、アリストテレスの *Physica* 218A25以下はこの発想が哲学者の思考に欠けていないことを示している。3を参照されたい。(14b ページ以下)

が、〈一〉とイデア数論的〈生成〉に対応することが示される*。

以上、次の三つの観点から、aiōn と時間の射影関係を推理してきた。一は、aiōn を生物に喩える見方(a)、二は、イデア論的屬性として aiōn を考え (b)、同時性 (U) および (V) を手掛りとして射影関係を考えるゆき方、三は、同じく aiōn をイデア論的屬性として見、時間の数的構造を手掛りとして射影関係を考えるゆき方、のそれぞれである。

これによって aiōn と時間というものの正体が明らかになったか。aiōn はプラトンにおいて〈aei〉すなわち〈常に〉を語源とすると考えられているのかいなか、〈大きな時間周期、自己のうちに完全に静止する一種の回転運動〉であるのかなのか (Schadewaldt, S. 375の句。)、それすらまだ謎のままである。

この節を了るにあたってプラトンのテキストの不整合と見える句を指摘した Cornford (1937) と、対する Böhme の反論を紹介しておこう。

Cornford は、〈…数に従って動く・永遠的な (aiōnion) 像〉という表現の中の〈永遠的な (aiōnion)〉に疑問を投げかける。〈動く像〉は〈…常に変わらない永遠〉と対照的であるのに、〈aiōnion〉と形容するのは〈奇妙である〉(strange) と Cornford は注意し、代りに〈aénaon eikóna〉すなわち〈流れつづける像〉と読み替えたい気持ちになると言っている。(P. 98 n. 1)

これに対して Böhme は、〈永遠的な像〉をそのまま維持する。〈像〉そのものは〈永遠的 (aiōnios)〉ではなく、Böhme の見方によれば、〈永続的 (aídios)〉である。しかしここでは、「時間は homonym に〈aiōnion〉と言われる。」(Böhme, S. 72) すなわち〈永遠的〉という表現は、あくまでも〈相似〉を含意した語法なのである。従って〈原型〉はあくまで〈aiōn〉であって、〈aídios〉と形容すべきではない。そこで次の問題は、それにもかかわらず〈原型〉が、29

A と 37D では、〈aídios〉と言われたのは何故か、である。これに関しては、〈aídios〉がそこでは広義に用いられており、〈aiōnios〉の対立概念としては狭義に、〈全時間に亘って (hápanta chrónon, 38C)〉の意味で、用いられると答えられる。

さらに Böhme, S. 74によれば、37D3、〈ところで、この生物の自然は永遠的なものであるが、…〉の件は、〈生物の自然 (本性) はそもそも〉というほどの意味で、新しい観点、すなわち〈生物一般〉のもつ時間性・生の時間性 (Lebenszeit) を提示するものである。すなわち〈aiōn〉の本来の意味、〈生の時間〉が、宇宙の原型のある種の時間性格であるということになる。

問題は〈aiōn〉の本来の意味に由来する〈時間性格〉であるが、本稿では解決への端緒に触れたばかりである。この辺で次の問題へ進みたい。

2 時間の始元

2-1 〈コスモス以前の時〉の問題

上に考察してきた時間は、いわばコスモス(秩序ある世界)の時間と言うことができる。この〈コスモスの時〉に対して、コスモスとしてこの世界が形成される以前の時はどうあったのだろうか。時間というものが普遍的な存在形式であるとすれば、〈コスモスの時〉と〈コスモス以前の時〉とは同じものであるはずだが、はたしてそうだろうか。

〈天〉の秩序ある構造が形成される以前の宇宙の状態は、〈空間 chōra〉と〈自然的諸力〉のみの存在する、〈時〉以前の状態と考えられている。(Tim. 52D) このような宇宙の原初的狀態のあとに、「天に秩序が与えられるのと同時に」天体がつくられ、そしてその規則的周期的運動によって〈時〉がつくられるのである。

このようにプラトンの宇宙論では、秩序と秩序以前の区別が明瞭に設定されているが、これに対してアリストテレスには、〈秩序以前〉の觀念があまりないように思われる。この点は注意

* Böhme, 4.Kap.— II: Zahl und Leben; III: Die systematische Funktion der Zahl は、示唆に豊む。

すべきことであろう。プラトンでは、「運動しかつ生きている」(Tim. 37C)ところの、そして〈天の秩序〉したがって〈時〉が形成される以前の、〈宇宙〉は、混沌とした、ある意味では時間というものを持たない世界なのである。

Plato's cosmology (p. 102~103) において Cornford は、プラトンにおける時間と空間は、近代以降のそれのように、「同じ地盤の上にある二つの条件」ではなく、〈空間〉は〈必然 anágkē〉に由来するものであるのに対して、〈時間〉は「神的英知の所産」であって、物質的実在に先き立つその枠組みのようなものとはことなる、と注意している。空間について、「デーミウルゴスから独立な、その全ての作用に先行する、必要条件」である、とも言っている。

このように、時間というものが、デーミウルゴスの「神的英知の所産」であるとすれば、秩序が造り出される以前には、いかなる意味においても、〈時〉というものは見いだせないことになるが、〈時〉にも様々な形態のものがあることを認めるならば、次のように考えてゆくこともできるのではないか。つまり、デーミウルゴスの創造した〈時〉は、宇宙の秩序を象徴するある特別な〈時〉であって、この〈時〉以外に想定できる別の〈時〉がすでにある、と考えることができるかもしれない。後者の〈時〉を前者から区別して、〈時の流れ〉とすることができるであろう。それは、あらゆる実在の底にヘラクレイトスがみとめた〈運動〉に近いものである。

そのような〈時の流れ〉は、なにかきわめてアモルフなものであり、〈生成 génesis〉という言葉のうちに分析しえない形で含まれているある意味なのかもしれない。〈時の流れ〉とは一体なんだろうか。そこで、「運動しかつ生きている」(Tim. 37C)と言われたその運動の具体的なあり方を、プラトンの叙述にもとづいて考えてみよう。

〈Tim. 52D4~53B5から〉

…そこで生成の乳母は、水気をふくみ火気をおび、大地や空気の性質 (morphás) を受け入れ、これらに従って生ずるあらゆる状態

(páthē) を身に受けて、あらゆる性質に現われて見えた。しかし不均一な・つりあいのない諸力 (dynámeōn) に充されていたために、そのどこを取ってもつりあっているところはなく、それらによってでたらめにどこもがゆられゆきぶられ、またそれ自身運動してあのものたち〔諸力〕をゆきぶる。

運動するそれぞれのものは、それぞれの場所へ運ばれ分けられる。それはちょうど、穀物を選別するためにカゴなどに入れてゆするのと同じで、かたく重いもの、軟らかく軽いもの、が、それぞれ別の場所に運ばれて、そこに座をしめる。そのとき、四元素 (géné) も受容器によってゆきぶられ——受容器自身ゆする道具のように運動する——不等なものほど離して分けられ、また類似するものほど同じ場所へ集められ押えられる。だから、それら〔四元素〕から秩序ある宇宙が形成される以前は、それぞれのものは別々の場所 (chōra) をしめていた。そして〔秩序形成〕以前は (prōtoútou)、それらの元素は全ていかなる比例もなくいかなる尺度もないありさまだった。火と水と大地と空気は、それぞれのある痕跡 (íchnē) を持っていたが、しかし神がモノに欠けていけばそうなるだろうような状態にあった。宇宙を秩序づける (kosmeísthai to pân) ことに着手したとき、それら〔四元素〕はまさにこのような本性を示していたのだが、神はそれらを、最初、形と数によって (eídesí te kai arithmoís) 形態的に整えた。…

このようにプラトンの描写した秩序形成以前の混沌とした宇宙の状態は、〈時〉そのもの以前でもあり、したがって〈生成〉あるいは〈単なる運動〉はあっても、そこに〈時〉的規定は適用できないことになる。〈時の流れ〉という漠然としたものを考えることはできるが、〈数〉としての〈時〉は存在しないと考えられる。

しかしやはり〈時の流れ〉という観念は困難なものを含む。〈時〉とは異なる〈時の流れ〉とは奇妙ではないか。そこでこの苦しい考えを持ち込むよりも、Cornford のように、プラトンの

神話的語り方あるいは物語的虚構に、〈時の創造〉という事態をも結びつけるべきなのかもしれない。

「一なるものの中で常に変わらない永遠の・数に従って動く・永遠的な像」(Tim. 37D)としての〈時〉は、元来、〈創造〉されるべきものではなく、〈時の創造〉は、神話という形式からやむをえず与えられた虚構なのであった、と、そう考えるべきなのかもしれない。アリストテレスは、「プラトン唯一人時を創造した。」と語った。(Physica, 251B17)そしてまた、「時は常にある」とも言う。(同書 251B22)つまり、プラトンは時にはじまりがあるとしたわけだが、アリストテレスからすれば、時は永遠から永遠にわたって存在し続ける、すなわち「時は常にある」わけである。アリストテレスは、現在われわれが見ているように秩序整然としかつ人間が住むに適しい宇宙的環境が、永遠の昔からそして永遠の未来に向けて存在すると考え、かつてこの宇宙は、現代の物理学が想定するように、途方もなく高熱の状態にあった、というような、全く別の原初の宇宙の状態が存在したとは考えないようである。

これに対してプラトンは、秩序ある世界以前の混沌の世界を想定していた、と考えることもできるように思われる。つまり〈創造以前〉は単なる神話的虚構ではなかったであろうと思われるのである。コスモスの創造と創造以前という歴史的順序は、単に、神話的叙述を採用することから来た結果なのであろうか。そこに描写された混沌たる原初の宇宙の状態は、なんらかの意味で〈事実〉と考えることができるように思われる。そこに描かれた、空間における〈諸力〉の状態は、虚構ではないであろう。〈事実〉の意味が筆者の解釈とは異なるけれども、Cornfordの次のような解決は、やはりある意味でその〈事実〉たることを示すものである。(Cornford (1937) p. 198以下。)

さきに示したティマイオスからの引用の中で「諸力」あるいは「痕跡」であるかぎりの四元素の状態を、Cornfordは、テアイテートス篇

における感覺的性質の分析や、(Theait. 155D f) ソピステース篇における「作用と受働の力としての生成」(Soph. 248C7; 246A)の考えと結びつけ、空間(chōra)における「諸力」の原初的なゆさぶられ・ゆさぶる運動が、人間の感覺とそれによって経験される物の諸性質に対応することを示している。(前掲書 p. 204)したがって、原初的な〈諸力〉は、天創造以前の宇宙の遠い過去にのみあった状態ではなく、Cornfordによれば、具体的な現在の世界からの一つの〈抽象 abstraction〉の結果なのである。実際には、性質とか分量などのカテゴリーが感覺に加わって具体的な個物が把握される。プラトンは、感覺だけを純粹にとり出してその構造を理論的に構成した。ティマイオスに叙述された混沌たる宇宙は、感覺の構造にきわめて似たものであり、その本質において両者が一致することは事実であろう。だがあの個所に言われている時間的順序は、それもまた、神話的虚構にのみ由来するものであろうか。筆者は、その時間的契機もまた〈事実〉として表示されたのだ、と考えたい。Cornfordのように、混沌たる宇宙の描写に投げ入れられた時間的順序の表示を文字通りに取らずに、現在の世界から抽象されて純粹に構成された一側面、つまり感覺と生成の側面として理解するならば、そうした純粹な感覺の世界・生成の世界の時間的契機の問題に、——天体の存在しない世界には〈時〉はまだないのだが——思いわずらう必要はなくなるであろう。その場合には、アリストテレスの言うように、「時は常にある」のであり、純粹な生成の世界にも規則正しい時のリズムは見いだせることになるだろう。

現代の宇宙物理学では、宇宙創生の数秒について語られる。プラトンが描いた混沌たる宇宙のうちに見いだされるべき〈時〉は、たとえばそのような〈数秒〉に相当するのかもしれない。プラトンの神話的叙述を、Cornfordの古典的な解釈に反して、現在の宇宙形成以前の・実際の・混沌状態を想定して書いたものと考えられるためには、ギリシア人そのものの考え方のうちに、〈混

沌状態における時の観念)を見いださなければならぬであろう。次に Guthrie (1962) のピュタゴラス学派についてのある余録を参考にして考えてみたい。(Vol.I p. 336以下。)

アリストテレスの時の定義〈時とは、前と後に関する運動の数である〉に、はっきり現われているように、ギリシア人は時を数によって限定されるかぎりにおいて考えた。プラトンにおいても、数が時の主要な構成要素であることにかわりがない。だが、このように完全な形態、すなわち数的構造を付与される以前の、いわば生みの素材としての〈時の流れ〉というようなものを考えることができないだろうか。ところで、ピュタゴラス学派の宇宙創生説は、〈無限者 *tō ápeiron*〉から素材を取り込んで宇宙自身が自己を形成する過程である。そのとき宇宙が〈無限者〉から自己のうちに吸い込むものは、〈時・息・空虚〉である。実は〈無限者〉そのものが、「まだ形成されない質料」の面、「数あるいは図形によって限定されない延長」の面、「形成されていない時の素材」の面、の三つの側面をそなえている。(前掲書 p. 340) 〈時の素材〉の面について言えば、そのような素材的な時が、原初の〈一〉によって吸い込まれ、数によって限定されて、本来の意味での〈時〉が形成される。かくして、秩序ある宇宙の時が本来の時であるが、ピュタゴラス学派の宇宙創生説は、単なる〈時の流れ〉すなわち〈時の素材〉を想定することを、ギリシア的思考の可能性として許しているように思われる。さらに、Guthrie はプルタルコスから次の文章を引いて〈時〉と〈時の素材〉の区別がギリシアの思想家に一般的に属するものであることを示している。(前掲書 p. 339)「それゆえプラトンは、時は諸天とともに成った、と言った。しかし諸天が造られる前にも運動はあった。そのとき、時はなかったのだ。なぜなら、あったものは、秩序や尺度や区別ではなく、単なる無限定な運動であって、それはいわば形なく・形成されていない・時の生みの素材なのだ。(Platonic Questions, 1007C)」この「時の生みの素材」は、〈無限者〉の時であると同時に

に、ティマイオスのコスモス以前の〈時〉のことであると言ってよいであろう。

しかし「時の生みの素材」とは何であろうか。我々はそれを漠然と、〈時の流れ〉と言った。Guthrie は、アリストテレスが、〈数〉としての時と、〈前と後の関係〉としての〈時の基体〉(Guthrie の訳)とを区別している「自然学」の一文を引証して、〈時の基体〉すなわち〈数〉をいまだ持たない・しかし前後の関係は持っている・時のいわば即自態に、〈時の生みの素材〉を対応付けている。——「魂がなければ、時は存在しえない。時の基体は *toúto hó pote òn éstin ho chrónos* 223A27) 別として。」——アリストテレスの「時の基体」については、「3 アリストテレスの時間論における〈持続〉と〈同時〉」において再説したい。

2-2 承前——神の不在からコスモスの形成へ (ポリティコス神話)

崩壊から再生への神話的宇宙循環の観念は、ポリティコス神話が与えるものだが、この宇宙循環の構図をティマイオスのコスモス形成の神話に移し入れると、コスモス形成以前と以後の境は、崩壊から再生への節目に相当する。〈生成の乳母〉である〈空間 *chōra*〉の中で運動する宇宙は、再生への助走をなすかのように見える。秩序ある宇宙が完成する以前の四元素の無定形なありさまを描く際に、プラトンは、「神がモノに欠けていればそうなるだろうような状態」と形容している。(Tim. 57B3) この無定形な元素は、〈形と数〉によってはじめてその形態を整えられる。

いわゆるポリティコス神話 (Politikos, 268 D5~274E1) において、宇宙循環の構図は、歴史の逆転——順行から逆行へ、逆行から再び順行へ——によって表わされる。これは古い伝説——かつて太陽と諸星の運行は現在と反対であったが、神があるときアトレウスに徴しを示して現在のようになった。(269A)——によるものだが、これを宇宙の歴史の方向の逆転という形に

換えて新しい物語に仕上げている。プラトンがここで取り入れるのは、この他に、クロノスの治世についての神話と、かつての人間が人間同志から生まれずに大地から生まれたという神話であるが、(269A~B)これらを材料として、大いなる時アイオンの推移の図式の中に歴史の低迷と高潮をみごとに描き出している。

ティマイオスの神は自然の創造にたずさわり、ポリティコス神話では自然の中の人間や諸々の生物の盛衰が主題であって、焦点となるものは相異なる。とくに、政治家の本質を問うことがポリティコスの対話篇としての目的であることからすれば、そこで人類の歴史に重心がおかれるのは当然であろう。しかし自然と歴史の不可分となった世界というものが共通の問題であることは否めない。ポリティコス神話では、その世界の低迷と高潮が神の不在と再来に依存するが、それは、ティマイオスで、秩序世界形成以前の自然が神の不在に対応し、時をはじめとする諸々の形相的秩序が神の創造作用によることに、符節を合せている。ところが二つの対話篇において異なる大きな点は、後者においては、神の不在から秩序の形成への過程が、時間的過程として述べられ得なかったことである。すでに述べたようにティマイオスでは、〈時〉の創造によって時間が開始することが前提されるから、かりに、神が不在の自然そのものから形相的秩序を獲得した宇宙への過程が、単に叙述の仕方からくる過程ではなく、それ自体、時間的過程として語られたのであるならば、〈時間以前の時間〉という不合理におちいらざるをえない。この不合理を救うのが、Cornfordの〈抽象〉による解釈であった。現在の世界そのものにおける秩序の階層の基底に、可能態としてあのような状態はつねに予想しうるものであろう。だが、Guthrieのピュタゴラス学派の宇宙論解釈についてすでに考察したように、より普遍的な〈時〉の観念をギリシア人が所有していたことは確かである*。かかる普遍的な〈時〉をティマイオスにあてはめるのには一つの障害がたしかに存在するが、ポリティコスの神話では、そのような

〈時〉がきわめて自然な形で想定され、物体の創造から自然全体の構成を論理的に仕上げるティマイオス以前の準備段階が表明されているように思われる。

ティマイオスの一句〈神の不在〉——「神がモノに欠けていれば」(53B3)——は、ポリティコス神話では、その意義がよりあざやかに語り示されている。次の個所である。

〈Pol. 272D6以下〉

時〔時代〕がこれらすべての事によって完成され、かくして変化が生じる必要がおこって、大地から生まれた種族のすべてが滅亡しつつしたとき、魂はそれぞれがあらゆる創造をなしとげ、それぞれの魂に割当てられた種子を大地に落しつつしたので、そのとき、全体〔世界〕の操縦者は、ちょうど船の舵の取手をはなすように、自分の監視所にひきさがって、宿命とそれに生得の欲望がこの宇宙を再び逆転させ始めた。

このように全体を操縦する神も、世界の諸々の領分を治めた神々もその座をしりぞいて、世界は彼らの支配と配慮を離れることになる。しかしその結果は、一人立ちしたかに見えたこの世界の混乱と破壊であった。——「地震」273A3がこれを象徴的に語る。——ともかくも「創造者にして父なる神の教えを思い起して」(273B1)生きていたこの世界も、やがてルーズになっていった。だがそのことの本質的な原因はなにか。

〈Pol. 273B4以下〉

こういうことの原因は、〔宇宙の〕合成の際の物的な要素 (tō sōmatoeidés) にある。すなわち、古い昔の自然と共に育ったもの、にある。なぜなら、現在のコスモスに到る以前は、それは著しい無秩序にあづかっていたからである。この世界は創造者からあらゆる美しいものを得たが、しかし以前の状態からは、天のもとにあるあらゆる困った事柄・不正な事柄を手にし、生物にそれらを付与することにもなったのである。

* Guthrie (1978), p. 271: What is the cause of the pre-cosmic motion? は示唆に富む。

このように神々の不在とその結果である世界の混乱と低迷そしてその本質的内在的な原因である〈物質性 *tō sōmatoeidés*〉は、かく明らかにされている。これを、ティマイオスの秩序世界形成以前の〈空間〉の不規則な運動と不完全な質料の状態に重ね合わせて理解することも不可能ではない。(この点に関して Cornford 前掲書 p. 206以下の解釈は示唆に富む。) 混乱ないし無秩序の内在的原因である〈物質性〉の詳しい状況の描写をここに望むことは不可能であるが、次の個所には、ティマイオスでの描写にも通じる〈原始自然〉——「古い昔のプュシス」(273 B5)——の暗い衝動の如きものを連想させる句が見られ、神の再来する様子がいきいきと描かれているように思われる。

〈Pol. 273D4以下〉

それゆえ、この世界に秩序を与えた神は、そのときすでに、ゆきづまった状態を見、〔これ以上〕嵐が吹き荒れ・動揺してばらばらになって限定なき不等の海に (*eis tōn tēs anomoiótētos ápeiron ōnta pōnton*) 没するのを憂慮して、再びこの世界の舵をとる位置につき、疫病にかかり・解きはなれた状態を、彼自身に従う以前の周期に反転せしめて、世界を秩序づけかつ改善することによって、世界を不死にして不老なるものとして形成した。

〈神〉〈限定なき不等の海〉〈不死にして不老なるものとして形成された世界〉、これらの句は、ティマイオスの世界創生のモチーフの萌芽と言ってよいのであり、〈秩序づけ改善する〉際の原型 (*parádeigma*) たるアイデアすら、すでにこの神話が始まってまもなく暗示されており(269 D5以下)、さらにアイデアと世界との関係——原型とその影像 (*eidōlon*) ——もまた明瞭に示されている。「限定なき不等の海」は、ティマイオスの原始空間 (*chōra*) を充分暗示する表現であろう。それはまた、テアイテートスにおける感覚の運動してやむことのない世界とその場である〈*chōra*〉 (Theait. 180E4) という先蹤をひきついでいる。かくしてここにテアイテートス以後のプラトンの自然哲学的関心の一貫した展開が

予想され得るのである。そしてティマイオスにおいて明瞭にされ得なかった数的秩序をいまだ有せざる〈時〉が、ここでは宇宙循環の時間的構造としてあまりにも明白に前提されていることが理解されるであろう。「限定なき不等の海」は、ティマイオスの〈*chōra*〉を暗示するが、273 B5, *tēs pálai potē physeōs* (古い昔の自然) も同様であろう。「古い昔の自然と共に育ったもの」とは、原初の四元素に相当するであろう。(273 E1, *pōnton* (海) を *tópon* (場所) とする異本も存在する。なお *chōra* に近い。)

それでは、〈物体の自然〉(269D6)は、どのようにしてすでにアイデアの〈影像〉であるのか。次に引用する個所では、〈回転運動〉が影像としてのそれであることを物語っており、そこにティマイオスのモチーフを見いだすことができるであろう。ここにアイデアが示唆されていることや、ティマイオスのコスモス創生の記述との関連が明白なことは、Gaiser, S. 206においても肯定されている。

〈Pol. 269D5以下〉

つねにひとしく同一であるということは、あらゆるもののうちでも、もっとも神的なるものにのみ適しく、物体の自然 (*physis*) はそのようなランクにはない。我々が天界とか宇宙と呼んでいるものは、多くの至福なることを創造者から分有しているのだが、しかし物体 (*sōma*) とも結合している。それゆえ、変化というものに全く無縁なることは不可能である。すくなくとも、できるかぎり、同じところで・ひとしく一つの運動をなすのである。したがって、回転運動を有しており、自己運動からの最小の偏位を維持する。……

あるときは、〔神自身とは〕別の神的原因によってみちびかれ、生命を再び獲得し、創造者から復帰してもらった不死性を受取る、またあるときは〔神がこの世界をみかぎって〕放置されるにいたって、自己自身によって運動し、時機 (*kairōn*) が来て自由な状態におかれて、無数の周期にわたって反対方向に進行する。それは、最も小さい足での最も大き

く最もつりあいある歩行の運動だからである。

ポリティコスにもその萌芽は見られるが、ティマイオスはアイデアとの関係において時間を定義している。それゆえにまたアイデアに対立する側面・時間のもつある種の非合理性についての関心が一つの問題領域として展開されることがなかった。かかる非合理性の一は、時間以前の時間の逆説であった。そのために我々が考察したポリティコス神話における宇宙循環の時間は、時間の普遍性をア priori に主張することになり、原始空間 (chōra) の運動を記述する時間が、通常的时间と同種のものかどうかは残された問題であろう。時間の数的構造の側面に対する連続性の側面は、かかる問題に対するアプローチの一と見ることができる。宇宙創生期の時間の問題としてではなかったにせよ、通常的时间のもつ構造の問題として取り上げたのは、言うまでもなくアリストテレスであった。そこで次に、プラトンが自覚的に展開させてはいなかった時間の連続性と、さらには同時性の問題についてのアリストテレスの所論を検討してみよう。

3 アリストテレス時間論における〈持続〉と〈同時〉

自然学第4巻10章でアリストテレスが分析している時間は、その連続性が中心であり、いわゆる持続としての時間である。したがって、時間の全体・永遠性の面はほとんど問題となっていない。(ただし、〈時間はある円環だ〉と言われている。) その分析の仕方は、時間の連続性を、運動体と運動、点と線、という他の具体的なものとの類比によってとらえている点が特徴的である。(Physica, 219B33以下。) 点集合のような抽象数学的概念を持たない哲学者の工夫と見なければならぬ。

アリストテレスによると、〈今〉と〈時間〉は一体のものである。「時間が存在しなければ、今は存在しない。今が存在しなければ、時間は存在しない。」(219B33) 〈今〉は、運動体・数の単

位・点、に対応している。

「時間は今において連続している、今によって分割される。」(220A5) それはちょうど、「点は長さを連結しかつ分断する」のと同じである。(220A10) なぜなら「点は一方の始めであり他方の終りであるから。」(同 A11)

ところで時間は〈数〉であるが、「時間は同一の点の数のようなもの〔それはアリストテレスによると2であり連続体に間隙を作る。〕ではなくて、…むしろ線分の端の如きものとして数である。」(同 A15) すなわち時間は数として「数えられたもの」(219B8) であるが、あたかも線分の距離の如きものと考えられていると言えよう。

距離に対応する理由は、時間が動くもの・運動であるからである。そしてこのような時間を数として規定する〈今〉は、時間の部分ではなくて、〈限界〉である。(220A21)

ところが〈数〉は、元来、最小のものとして2を有するが、あたかも線分の分量 (mégethos) には「最小のものは存在しない」(220A30) ように、時間にも「分量に関しては最小の時間は存在しない。」(同 A32) このように連続量としての時間が線分との類比においてすでに明瞭に把握されている。

今日のように〈実数〉の概念を知っている我々にとっては、アリストテレスがなぜ、運動の〈数〉と時間を定義づけたのかが理解しにくい。〈数〉とは、アリストテレスにとって、2 3 4……の如き〈整数〉を意味しているからである。なぜ、運動の〈量〉としなかったのか。〈量 mégethos〉ならば、連続量を示しうるからである。

その理由は次の二つの事に関連しているように思われる。一は、時間が〈今〉を本質的契機として存在すること(220A1)、二は、〈今〉が〈限界 péras〉であること(同 A21)、にかかわる。〈限界〉であるかぎりの数は、〈整数〉でなければならない、という前提があったように思われる。〈分数〉はしばらくおいても、少なくとも〈無理数〉は〈限界〉とはなり得ない。そして、とりわけ〈数1〉がこの限界すなわち今を決定す

るものであろう*。

このように、時間は本来は、連続量であることが明瞭に認められているが、定義上は整数列に対応するものとして把握されたと考えられる。つまりアリストテレスの時間の定義は、任意の時間の長さを定義したものではなく、時間の〈形相的構造〉を明らかにしたものと理解することができる。すなわち時間の実際の計量から——日時計・水時計による——応はなれて、いわば存在論的定義がなされたと考えられる**。

純粋に連続量としての時間と定義上の・形相的構造であるかぎりの時間との区別に関連して、次の事に注意してみたい。アリストテレスは、しばしば〈hō pote ón……〉という句をもちいる。(219A20 ; B11 ; 14 ; 18 ; 26 ; 220A8 ; 223A27など。) 223A27に関しては、〈that, being which time exists.〉〈the substratum of time〉(Ross, *Aristotle's physics*, p. 611) 〈that of which time is an attribute〉(Hardie et Gaye)のように訳される。これは、ほぼ術語的に、〈to eínai〉〈tōi logōi〉に対比して使われ、後者が定義上の〈時間・今〉であるのに対して、前者は、subject, substratum, in its own nature (Hardie et Gaye)と訳される通り、カテゴリー的限定が付加される以前の〈時間・今〉、〈時間・今〉の基体・即自態・単に主語としてみられているそれ、である。あえて直訳すれば、〈それが、在るといふかぎりにおいて、…であるところのそれ〉となろう。しかし、この区別はよいとして、〈時間・今〉の〈基体〉とは何のことを言うのか、と一歩ほりさげると問題は複雑である。

例えば、219B10f : tō gár nūn tō autō hō pot' ēn——tō d'eínai autōi héteron. の解釈は、Ross

* 同 A4. Ross, *Aristotle's physics* は、この箇所には注釈を与えている。〈hoion mónas arithmōū と付け加えることは不適切である。なぜなら、数が有限数の単位から成っているように、時間は有限数の今から成っているのではないし、また運動は有限数の位置から成っているのではないから。〉(p. 601) すなわち〈数〉と〈連続〉の矛盾を指摘しているわけである。なお Wieland, S. 325にもこの箇所が別の角度から取り上げられている。

** このように理解するならば、前述の Ross のいただいた疑問もまた永解するようになる。

(前掲書 p. 598), Hardie et Gaye が妥当と思われる。Wieland (前掲書 S. 324~5) はやや思い切りすぎた感がある。「アリストテレスが〈hō pote ón nūn〉と言うとき、彼はそのことによって、今在るところの事象、すなわち運動する物のことを指している。」(S. 324)と述べているが、〈事象〉と〈今の基体〉を同一視する根拠が弱いように思われる。しかし次のような発言には興味深いものが感じられる。「〈今 (nūn)〉は、物一述語であり、運動する事象に関係する。〈時間〉はそれに反して、その論理的機能に関して、述語の述語であり、直接にはこの事象の運動に関係する。したがって間接的にのみ事象そのものに関係する。」(S. 325)

Guthrie が、ピュタゴラス学派の無限者が包蔵している時の素材に対応させたものは、アリストテレスのこの〈hō pote ón〉としての〈時〉であった。しかし〈hō pote ón〉としての〈時〉には、魂はかかわらない。魂よりも古い自然というものがあのだろうか。アリストテレスは述べている。—「しかしもし、魂と魂のヌース以外に数えることができる存在者がないとすれば、魂が存在しない場合、時間が存在することは不可能である。それが、在るかぎりにおいて、時間であるところのそれ (hō pote ón) は、在るであろう、もし魂がなくても運動が存在することが可能であるならば。」(223A25)

以上〈持続〉について。次に〈同時性〉についてアリストテレスはどのように分析したであろうか。

〈Physica 218A25以下〉

さらに、時間的に同時 (háma) であること、そして以前でも以後でもないことが、同じ一つの今の中にあることであるならば、以前の事と以後の事がこの今の中にある場合、一万年前に起った事と今日起った事とは同時であり、以前・以後の区別は、いかなることについてもなくなるだろう。

ここでアリストテレスは、〈同時〉を〈同じ一つの今の中にあること〉と言いかえており、こ

れをアリストテレスの〈同時〉の定義と受け取ってよいであろう。ところで現代では〈同時〉は一つの問題概念となっている。この問題概念については余りにも多くの議論が起った。ここでそのことに立ち入る余裕は全くない。しかしアリストテレスがどのような条件を〈同時〉が成立する根拠として与えたか、ということは興味のある問題であろう。次の個所はすでに取り上げたものであるが、再度、提示してみたい。

〈219B10以下〉

しかし、全ての同時の時間は同じものである。なぜなら、基体としての (hō pote ēn) 今は同じものであるが、その何であるか〔属性〕は異なる。そして、今は、以前と以後であるかぎりの時間を区切る。

この一文の意味するところはこのようなであろう。基体としての、即自的・未限定的なものとしての〈今〉は〈同じもの〉である。例えば、同時に——同じ一つの今の中で——Aは戸口を出てゆき、Bは入って来る、というような場合、両者のすれちがうときに、同じ一つの今が対応している。(Hardie et Gayeに依る。)しかしその〈何であるか〉に関しては、Aが出てゆく今か、Bが入って来る今か、は異なる。つまりその〈属性〉は異なる。

それでは、ここに言われるところの〈基体〉としての今の同一性の根拠は何であろうか。

〈223B6以下〉

このように、同時として限定される諸運動には同一の時間が属している。ただ一方の運動は速く、他方はそうでないであろう。また、一方は場所運動で、他方は変化であるかもしれない。しかし、その変化と場所運動の数が等しく同時であるならば、時間は同一である。そしてこの故に、運動は異なり離れていても、時間はあらゆるところで同一である、なぜなら、等しく同時な運動の数は、あらゆるところで一であり同一であるから。

このアリストテレスの論証によると、〈同時〉の根拠は、〈等しく同時な運動の数が、あらゆるところで一であり同一である〉ことにあること

になるが、〈同時〉を〈同時な運動〉によって説明するものであるから、明らかに循環論証である。問題は、そのような〈等しく同時な運動〉をどこに求めるかであろう。

そこで、この〈等しく同時な運動の数〉をいかにして数えることができるか。「時間は運動によって測られ、運動は時間によって測られる」(223B15)と言うのであるから、かかる〈等しく同時な運動の数〉を測るには、ある基準になる運動がなければならない。それをアリストテレスは、〈均質な (homalēs) 円運動〉とし、それを〈あらゆる同種類の運動の基準〉と呼んでいる。(223B19) さらに、この〈均質な円運動〉は、「その運動の数がもっともよく知りうる」故に、「もっともよく基準である」と述べ、結局、プラトンと同様に、「時間は天球の運動であるように思われる」(223B22)と述べている。このようにして、〈等しく同時な運動の数〉の存在するモデルとして、われわれは〈天球の運動〉を見いだす。それは言わばあらゆる運動・変化の束であり、この束の断面が〈同時〉であることはこの束の本性のうちに先天的に含意されているのであろう。

かくして、「人間的事象、自然的運動・生成・消滅を有する他のあらゆる事象が円環をなす」(223B25) のも、〈均質な円運動〉がもたらす世界時間の性質に由来することであろう。しかし、〈同時〉すなわち〈等しく同時な運動の数〉の〈同時性〉の根拠は、〈根源的なもの (tō prōton)〉としての〈均質な円運動〉(223B18)にあるという点はどうであろうか。アリストテレスが、同時性に関していただいた問いは、「時間は魂とどのように関係しているか、なぜ時間はあらゆるもののうちに在るのか、大地にも海にも天にも。」(223A16)という宇宙論的な問いであり、それはやはり認識論的な問いとは交らないものであろう。現代認識論はかかる宇宙論的な問題の底に疑問符の楔をうち込んだのである。

むすび

プラトンとアリストテレスの自然哲学の中で、以上に概観したように、時間がその基本的カテゴリーとして慎重な検討に付されていることは、驚くべき科学的洞察を示すものであろう。拙稿を了るにあたって、彼らの同時代人が〈自然と時間〉についてどのような観念を抱きえたかについて若干の考察を試み、さらにいくつかの補遺をつけくわえたい。

時間は自然の基本的構造であることを示しているのは〈phýsis〉の意味であろう。〈自然〉の〈おのずからしかり〉という意味とはちがって、語根が〈phýō〉と共通の〈phy〉で、〈成長する〉がその原義だとされる。したがって〈phýō〉は〈産出する〉を意味する。〈physis〉は単なる〈延長〉に還元されるような物体とは異なっている。したがってギリシア人が〈自然〉というものを考えるとき、まず〈植物〉(phytón)や動物を思い起し、しかるのちに自然全体をいきたものとして表象するといった風であったろう*。

ところで〈成長するもの〉としての〈phýsis〉は、植物がそうであるように、成長しては子孫を産み死んでゆくという生成消滅の過程を内包している。それは斉一な完結したプロセスであり、不規則な変化ではない。あたかもこのプロセスに人は時間の原型を見るのである。つまり自然そのものが、時間的周期性を内蔵しているわけであり、特別な装置が工夫される以前にすでにそこに時計の原型がある。しかし正確さという点では天体の運動には全く及ばないので、時間の道具とはならないが、人々はそこに時間というものの〈経験〉を十分見出しえたのである。

このように自然というものが、生れては死するという時間的プロセスとしてギリシア人によって表象されるということは、さまざまな角度から検証されるように思われる。

その一つは、オルプエウス宗教の先蹤となったディオニュソス崇拝者の有するパリンゲネシア(再受肉・復活)の観念である。もともと草木の神であったディオニュソスを信仰した農民

* Mannsperger, D. を参照。

たちは、春の到来とともに植物が〈復活〉し大地にまた恵みが与えられることを喜んだが、その信仰の中で、一定の自然についての観念が形成された。Cornford (1912) :—From religion to philosophy—は次のように言う。「いまだに未開社会に広く見られるこの再受肉の観念のうち、我々は、生存の周期、光明と暗黒の半円からなる生命の輪、の最初の概念を見出す。それは一つの生命ないし魂が連続して循環する輪である。」(p. 160)この生命の輪、生命的自然の循環の観念は、〈生成の円環〉というきわめて普遍的な時間概念として、後にギリシア人によって展開されることになる。

さらに宇宙創生説における時間の特殊なあつかいは、このような素朴な自然観に較べれば、詩的想像に偏したものではあるが、やはり自然というものの時間的性格を彼らがつよく抱いていたことを物語る。

時間が宇宙創生説において主役を演ずるということはまず考えられない。ヘシオドスの神統記においても、時間は神格化されていない。しかし次に見るように、前6世紀の神秘家達は、時間(chrónos)を宇宙創造の主役とした。それはきわめて特異な発想であるが、しかし宇宙創生の原理を極限まで追求したものと見れば、アナクシマンドウロスの時代の可能性の範囲におさまるように思われる。

前6世紀の神秘家とは、オルプエウスとペレキュデスである。

ダマスキウスによると、オルプエウスは、〈第三の原理(archē)〉を〈クロノス(時)〉とする。〈クロノス(時)〉は、〈雄牛とライオンの頭部をもち中央に神の顔をもつ竜蛇〉として寓意的に表現される。他の二つの原理は、〈水〉と、質料から固定されて出来た〈大地〉である。〈時〉は、まず、アイテール、カオス、エレボス、を生み、次に、〈非物質的神〉を生む。〈非物質的神〉は、黄金の翼と雄牛の頭をもっている。しかしこのような寓意的な神統記としてあらわされるオルプエウスおよびオルプエウス宗教の固有の教説とされるものが、アルカイック時代・

前6世紀頃、すでに確立していた (Guthrie はこの説をとる。) のかどうかは、説が分れる*。
次に、前6世紀中頃、〈ペンテミュコス(五つの峡谷)〉を著したプエレキュデスは、なかば神学者なかば自然学者であるが、ピュタゴラスと同様に〈靈魂輪廻〉の説をといたとも言われる。(Zeller-Nestle, S. 24) しかし、プエレキュデスとピュタゴラスのかかる思想的交流が可能なような間柄は確実ではない、と Kirk-Raven は言っている。(Kirk and Raven, p. 51) プエレキュデスの宇宙創生論的神話の〈最初の三つの原理〉は、〈Zas〉〈クトニエー〉〈クロノス(時)〉であり、〈クロノス(時)〉は、〈自分の種子から、火・大気・水、を造った〉とされている。(Diels-Kranz, 7A8, ダマスキウスの記述による。) 〈Zas〉は、ゼウスを語源とするプエレキュデスの造語、クトニエーは、chthōn からの造語で大地を表わしている。この三者は、〈永久に存在している〉とされている。したがってプエレキュデスの宇宙創生説には、時間的はじまりはなく、それはちょうど、アナクシマンドウロスの〈永遠の運動〉をなすと・アペイロンに対応するようと思われる。〈クロノス(時)〉は、前6世紀の宇宙創生論にしては、あまりにソピスティケイトされている、とも言われる。(Wilamowitz の見解。Kirk and Raven, p. 56) 寓意にみちた神話を基本的文脈としているプエレキュデスにおいて、〈Chronos(時)〉は、神々の祖たる〈クロノス(Kronos)〉に語源的に対応している。(Kirk and Raven, p. 55) ヘシオドスの〈カオス〉に代わさるべき新しい原初の次元として考えられた〈クロノス(時)〉であろう。(同書、P. 55) ヘシオドスの〈カオス〉が天と地の裂け目を意味して、空間的であるのに対して、プエレキュデスの中心的原理は、回帰する宇宙時間である。アナクシマンドウロスのト・アペイロンが意味的構造連関をもったものとするならば、プエレキュデ

スの宇宙創生論は詩的想像力による寓意化の域を出ないが、時間が自然の基本的構造であることは、すでに十分感じ取られているのではないであろうか。しかし〈クロノス(時)〉をあまりに抽象的・形而上学的にとすることは、たしかに慎むべきであろう**。

このようにギリシア人は、自然の時間的構造をさまざまなイメージによって早くから表現していた。〈phýsis〉という語が、完結した一定の時間的プロセスをふくんだ〈成長〉の意味を有することは、我々にとってきわめて興味深い点だが、アリストテレスは〈phýsis〉のこの意味、すなわち〈成長するもの〉の生成(génesis)に一瞥を与えてから、(Met. 1014B16; Physica, 193 B13) 自然的存在者の自己内在的運動原因へ(Met. 1014B19) 〈phýsis〉の意味を移してゆく***。

したがって、時間的プロセスも、この原因によって生じる運動の一つの属性ないし構造として見直される。〈前と後に関する運動の数〉という〈時間〉に与えられた定義は、超個体的な・世界の普遍的構造としての時間を提示したものであり、〈成長〉の意味での phýsis に内包されていた〈時間〉は、自然の存在論的構造として顕在化されたのである。

〈2-2〉で論じたポリティコス神話では、そこでも触れたように、単なる物質的宇宙ではなく、人類の歴史と自然の全体を視野に入れた宇宙史が問題となっている。その中で語られるクロノスの支配についての説話は、秩序ある国制を考える手掛りを与え、人類社会の宿命の変転を示唆することによって、歴史哲学的意味を提供する。この歴史哲学的端緒はいくつかの対話篇でさらに展開される機会に出会う。ティマイオスやクリティアスに登場する人類史の素描は、宇宙という巨大な舞台装置のかわりに、実在するアテナイの中の出来事を描いている。循

* Linforth, I. M. は Guthrie 説に反対している。Kirk & Raven p.37. Diels-Kranz, オルプエウス B13.

** Kirk and Raven, p. 56 note 1. Diels, H., S. 31を参照。

*** 〈phýsis〉の語根〈phy-〉が〈成長する〉を意味する、に反対する Burnet, p. 10以下; Ross, Aristotle's Metaphysics, vol. 1, p. 296を参照されたい。斎藤忍隨、「自然」p. 158以下; Mannsperger をも。

環周期は9000年と長大であるが、それはすでに共同体の歴史である。このアテナイ9000年の時間がポリティコス神話の宇宙循環と共通する点を有するとすれば、それは、時間の流れを崩壊(phthorá)が一度堰止め、そこに歴史の非連続的構造をあらわにする点であろう。このいわば歴史の中の〈非存在〉を中心として歴史的時間の特質を考察することは、本稿の限りを超えるものである。

文 献

(*印: 本文中引用されたもの。)

テキスト・注釈書

- Platon: *Platonis opera*, ed. J. Burnet (1962)
 Aristoteles: *Aristotelis opera*, ex recensione I. Bekkeri (1970);
Aristotelis physica, ed. W.D. Ross (1960);
Aristotle's physics, W.D. Ross (1979);
Aristotelis metaphysica, ed. W. Jaeger (1960);
Aristotle's metaphysics, W.D. Ross (1981)
 Plotinos: *Enneades III, with English transl.* by A.H. Armstrong (1980)
 Diels-Kranz: *Die Fragmente der Vorsokratiker* (1952)

翻訳

- * Schleiermacher, Fr.: *Platon Sämtliche Werke*
 * Ross, W.D.: *The works of Aristotle*, vol. VIII, *Metaphysica*
 * Hardie, R.P. et Gaye, R.K.: *The works of Aristotle*, vol. II, *Physica*

研究書その他

- (1) * Beierwaltes, W.: *Plotin, über Ewigkeit und Zeit* (Enneades III 7) (1981)
- (2) Bergson, H.: *Durée et simultanéité* (1968)
- (3) * Böhme, G.: *Zeit und Zahl* (1974)
- (4) * Burnet, J.: *Early Greek philosophy* (1930)
- (5) * Cornford, F.M.: *Plato's cosmology* (1937)
- (6) * 同 *From religion to philosophy* (1912)
- (7) * Diels, H.: *Kleine Schriften zur Geschichte der antiken Philosophie* (1969)
- (8) Einstein, A.: *Über die spezielle und die allgemeine Relativitätstheorie* (1977)
- (9) Eliade, M.: *Kosmos und Geschichte* (1986)
- (10) 同: *Das Heilige und das Profane* (1985)
- (11) 藤沢令夫: EIKŌS LOGOS-Platon における自然学のあり方について——西洋古典学研究II p. 51-66.
- (12) * Festugière, A.J.: *Le sens philosophique du mot AIÓN*
- (13) Friedländer, P.: *Platon I, II, III* (1964; 1964; 1975)
- (14) * Gaiser, K.: *Platons ungeschriebene Lehre* (1968)
- (15) Grünbaum, A.: *Philosophical problems of space and time*.
- (16) * Guthrie, W.K.C.: *A history of Greek philosophy*, vol. I, II, V. (1962, 1965, 1978)
- (17) 波多野精一: 宗教哲学; 時と永遠—全集第四卷 (1969)
- (18) Heinemann, G. (Hg.): *Zeitbegriffe* (1986)
- (19) Husserl, E.: *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins* (1893-1917), (1966)
- (20) Jaeger, W.: *Paideia, die Formung des griechischen*

Menschen (1989)

- (21) Kahn, C.H. : *Anaximander and the origin of Greek cosmology* (1960)
- (22) Kroes, P. : *Time : its structure and role in physical theories.* (1985)
- (23) * Kirk and Raven : *The presocratic philosophers.* (1964)
- (24) * Krämer, H.J. : *Arete bei Platon und Aristoteles.* (1959)
- (25) Kirk, G.S. : *Heraclitus, The cosmic fragments.* (1978)
- (26) * Mannsperger, D. : *Physis bei Platon* (1969)
- (27) Mehlberg, H. : *Time, causality and the quantum theory* (1980)
- (28) Owen, G.E.L. : *Plato and Parmenides on the timeless present;*
- (29) 同 Aristotle on Time.
- (30) * Rudolph, E. : *Zeit und Ewigkeit bei Platon und Aristoteles,* in *Zeit, Bewegung, Handlung* (1988)
- (31) Rohde, E. : *Psyche, Seelencult und Unsterblichkeitsglaube der Griechen*
- (32) Reichenbach, H. : *Philosophie der Raum-Zeit-Lehre* (1977)
- (33) * 斎藤忍随 : 幾度もソクラテスの名を I (1946-1965) (1986)
- (34) * Schadewaldt, W. : *Anfänge der Philosophie bei den Griechen* (1978)
- (35) Stenzel, J. : *Zahl und Gestalt bei Platon und Aristoteles;*
- (36) 同 *Studien zur Entwicklung der platonischen Dialektik von Sokrates zu Aristoteles.*
- (37) Scodel, H.R. : *Diairesis and Myth in Plato's Statesman* (1987)
- (38) * Wieland, W. : *Die aristotelische Physik* (1970)
- (39) * Zeller-Nestle : *Grundriß der Geschichte der griechischen Philosophie* (1971)